

# 企画展 ひらつかの家康伝説

2023年

会 期：10月19日（木）～12月10日（日）

会 場：平塚市博物館1階寄贈品コーナー

平塚市域には徳川家康に関する史跡や伝説が、数多く伝えられています。そのなかには史実として確認できない事柄もありますが、これらは天正18年（1590）の徳川家康の関東入国以来の地域と家康との関わりのなかから生まれ、伝えられてきたもので、市域の地域性が表されているといえます。

本企画展では、平塚市域における徳川家康にまつわる史跡や伝説、ゆかりの品の紹介を通して、家康と地域の関係を考えます。



葵紋付銚子（豊年山清雲寺蔵／平塚市博物館寄託）

## 企画展

# ひらつかの**家康**伝説

会期 10月19日(木)～12月10日(日)

平塚市域には徳川家康に関する史跡や伝説が、数多く伝えられています。そのなかには史実として確認できない事柄もありますが、これらは天正18年(1590)の徳川家康の関東入国以来の地域と家康との関わりのなかから生まれ、伝えられてきたもので、市域の地域性が表されているといえます。

本企画展では、平塚市域における徳川家康にまつわる史跡や伝説、ゆかりの品の紹介を通して、家康と地域の関係を考えます。



## ■ 御茶屋寺—清雲寺

徳川家康は、関東入国後、甲斐市城海辺でしばしば鷹狩りをおこなった。その際の休息所と伝えられるのが、甲斐市豊田本郷の豊年山清雲寺である。

清雲寺は慶長元年（1596）の中原御戦役以前からの休息所と伝えられ、家康が茗水といわれる境内の井戸の水で茶を飲んだといわれることから、別名「御茶屋寺」とも称される。

清雲寺には家康から賜ったと伝えられる茶碗のついた銚子・茶碗がこされている。また、家康が茶を飲む際に使用したとされる茶釜もこされており、寺宝として今に伝わっている。

ちちのつたて 歴史博物館



「関中御茶屋記略」翻写、茶碗・銚子  
 豊年山清雲寺に伝わる茶碗・銚子。徳川家康が茶を飲む際に使用したとされる。茶碗には家康が茶を飲む際に使用したとされる茶釜の模様（三つ葉の紋）が描かれている。



豊年山清雲寺

豊年山清雲寺  
 豊年山清雲寺は、徳川家康が茶を飲む際に使用したとされる茶釜の模様（三つ葉の紋）が描かれている。また、家康が茶を飲む際に使用したとされる茶釜もこされており、寺宝として今に伝わっている。



茶碗

豊年山清雲寺に伝わる茶碗。徳川家康が茶を飲む際に使用したとされる。茶碗には家康が茶を飲む際に使用したとされる茶釜の模様（三つ葉の紋）が描かれている。



### ■ 中原御殿

中原御殿は徳川家康の居所である。家康が休息所としていた善田本願村の清賢寺が文禄4年(1595)に火害にあった。これにより、翌豊臣元年(1596)に砂丘上の中原の地へ中原御殿が造営された。中原御殿には四方にめぐらされた幅6間(10.9m)深さ3丈8尺(5.4m)の堀、高さ3尺(90cm)の土塁の先のほか、壁の手状をした御殿への道など、防御機能が備えられていた。

以後、家康は中原御殿を拠点とした電打りのほか、御殿での大名の謁見や御坊行書などもおこなった。中原御殿は臨時の政治の場としても機能した。家康没後、中原御殿は使用されなくなり、明暦3年(1657)に解体された。跡地には東照宮御殿が建立された。現在、中原御殿跡の大部分は平塚市立中原小学校の校地になっている。

ふるさと博物館



善田村の中原小学校

〒243-0292 神奈川県平塚市中原1-1-1  
TEL:0463-85-1111



『徳川家康御殿』中原上段

図説 巻四

1657年(明暦3年)に徳川家康の御殿が解体された。跡地に東照宮御殿が建立された。この図説は、御殿の跡地を示している。



御殿の山門

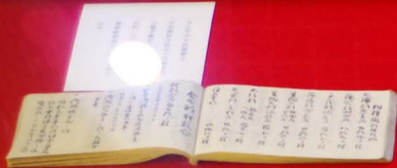
〒243-0292 神奈川県平塚市中原1-1-1  
TEL:0463-85-1111



御殿の御坊

御殿跡の一角に建てられた御坊は、家康の御廟として、1657年に建立された。現在は、御殿跡の一部を占めている。





万手扣寛帳

天保10年（1839）8月

中原上郷の橋部氏が作成した中原に関する歴史の概要記録。中原御殿は明暦3年（1657）に撤去とある。撤去部材は同年に発生した明暦の大火にともなう江戸の復興資材に用いられたと考えられている。

また、元禄10年（1697）に御殿跡地



相模国大住郡中原上宿雑社東照神社図

明治14年（1881）11月1日

中原御殿跡に建立された東照宮の図。縄の地下に石塚があり、その中に『中原御殿記』が納められていたといわれる。



日枝神社内の東照宮

平成10年（1998）

中原御殿跡にあった東照宮は、明治42年（1909）7月に日枝神社へ遷され、遷座した。同年7月の大野村立商業中学校の御殿跡地への新築・移転にともなう、東照宮も遷座された。

## ■ 成瀬酢

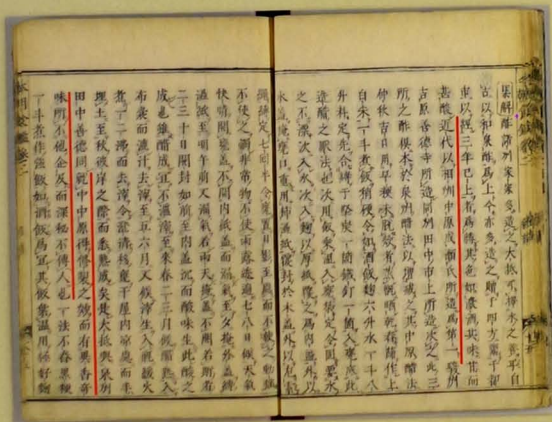
成瀬酢はかつて中原で醸造され、将軍家御膳酢として献上されていた酢である。中原代官成瀬五左衛門が中原御殿前で酢屋を営んでいた佐藤金右衛門方の酢を家康に献上したところ、大変喜ばれたことから御膳酢となったと伝えられる。

17世紀末に著された食の事典『本朝食鑑』に「近代では相州の中原の成瀬氏で造られるものが第一等」と評価され、名酢として知られていた。

中原宿は御膳酢献上の役を担ったため、平塚宿への人馬役負担免除の特権が認められていた。しかし、享保8年（1723）に献上が廃止されるとその特権を失い、天保期（1830～1844）には酢の醸造もおこなわれなくなっていた。

献上廃止の理由は、京都の製法を導入したことで田舎風の味を好んだ将軍家の不興を買ったためと伝えられているが、享保改革における特権廃止の一環であったと考えられる。

### ひらつかの家康伝説



#### 本朝食鑑

元禄10年（1697）

医師の人見必大が元禄10年（1697）に刊行した食事療法についての本草書。酢の項目に「近代では相州中原成瀬氏の造る所が第一等」「中原修製の妙を得て異香奇味有り、他の企て及ばざる所にて深秘人に伝えず」と記され、元禄期には成瀬酢が最上の酢で、独特の風味を出し、その製法は秘密にされていたという。

国立国会図書館蔵



#### 酢甕

16世紀

中原上宿の磯部家で成瀬酢醸造に使用されていたと伝えられる常滑焼の甕。実物資料が2階常設展示室に展示されています。

平塚市博物館蔵



#### 地面に据えられた酢甕の写真

酢甕の口を地面より7、8寸高くした状態で地面に据え、蓋をして酢を醸造したという。

なお、『大野誌』には寛政10年（1798）9月に高橋氏なる人物が磯部氏に伝授した中原酢の製法書「相州大住郡中原村御所酢仕込様之事」が掲載されている。

『大野誌』

## 中原御殿関連年表

天正 18 年 (1590)	家康関東入国の時、中原に立ち寄り放鷹(「泰政録」)
天正 19 年 (1591)	横野村今井郷右衛門、中原御殿へ召し立てられ唐子御神の由来を尋ねられる。「(風土記稿)」「(記略)」
文禄元年 (1592)	朝鮮の役(上杉原勝・伊達政宗・南部信直・佐竹義家らとともに家康・中原へ)。2月4日、中原着。「(風土記稿)」「(記略)」「(中原御言記)」
文禄 4 年 (1595)	豊田村清雲寺が洪水により水没。
慶長元年 (1596)	中原御造営(代官頭伊奈忠次が見立て、玉井将刀=小川柱左衛門が町割りをする)。大堤ほか金目川通りの堤を普請。
慶長 4 年 (1599)	2月 10 日中原に逗留(清雲寺伝)
慶長 5 年 (1600)	9月 15 日関原の合戦。
慶長 6 年 (1601)	中原御林の植付。
慶長 7 年 (1602)	11 月伏見へ向け江戸を出発し途中鷹狩を行う。
慶長 8 年 (1603)	2 月家康征夷大将軍に任じられる。10 月家康江戸へ帰る。
慶長 9 年 (1604)	2 月中原御殿周辺で放鷹(「史紀」)。3 月家康伏見へ向け江戸を出発、4 月 8 日江戸へ帰る。
慶長 10 年 (1605)	1 月家康伏見へ向け江戸を出発、2 月秀忠伏見へ出発、4 月秀忠征夷大将軍に任じられる。5 月秀忠江戸へ帰る。7 月家康上洛、9 月家康江戸へ帰る。10 月下旬中原。
慶長 11 年 (1606)	11 月下旬中原御殿にて、津久井の取野村土豪で今川旧臣神原徳義の子、佐藤新八郎徳氏を謁見。昨年兼兼に御目を命じたが、病没のため(「風土記稿」)。
慶長 12 年 (1607)	2 月 29 日家康中原で放鷹、同日夜、中原御殿で金の茶具・釜・水さし・ひしゃく・同柄杓置・茶約以下のごとごと約失(「当代記」)。銀の茶釜盗竊、御殿茶土相(「餐」)。「史紀」では会田 勝七(掛川)・落合長作(田中)・岡部藤十郎(蒲田)おけ(「当代記」)。7 月、野戦城修築あり、家康帰る。10 月家康江戸に下向、10 月 14 日中原にて放鷹、佐藤新八郎徳氏を再度謁見(「風土記稿」)。12 月家康放鷹に帰る。
慶長 14 年 (1609)	5 月御殿番落合長作は鬼界島、相模勝七は隠岐島、岡部藤十郎は伊豆大島へ流罪(「当代記」)。
慶長 15 年 (1610)	2 月 4 日、慶長 12 年に中原御殿の茶具を盗んだ賊の逮捕。宿願の番士落合長作、岡部藤十郎、会田勝七郎等、罪を許され出仕(「史紀」)。3 月 28 日、駿府城の女房、窃盗の罪で処刑(「史紀」)。「去年失たりし金子の茶具、この 2 月出たりしこの女房のしわざかと人口也」(「当代記」)。6 月代官頭伊奈忠次死去、坪井・興津・大谷・中川・有谷が中原代官となる。
慶長 16 年 (1611)	10 月 10 日 ~ 12 日家康中原に宿泊(御定の本多正純・安藤謙吉・成瀬正成・松平正綱・村越直吉・後藤光次ら同道、安藤対馬守備役の命により、御殿以下の事を勤める)。「(駿府日記)」11 月 18 日藤沢御殿に鎌倉鶴岡八幡宮住持齋院参院、頼朝以北各家代々のことご垂問あり、同 19 日中原泊、御殿において鎌倉荘殿儀「保暦間記」を精読し、鎌倉の古事物語あり(「駿府日記」「史紀」)。
慶長 17 年 (1612)	同 10 月 2 日家康江戸へ下向。12 月 2 日江戸を立ち、同 15 日駿府に帰着、途中及び関東各地で放鷹。同 10 月 22 日中原に逗留(「駿府日記」)。12 月 6 ~ 13 日中原に逗留(「駿府日記」)。6 日甲斐武田氏穴山梅雪の旧臣で小田原に監置せられていた馬場左衛門、小田原城主大久保忠隣に異心ありの旨を提出。家康、附近の本多正信に忠隣の身辺調査を命じる(「史紀」「風土記稿」)。12 日「江戸より御使として土井大炊頭小田原原御へ参り、うちうち聞え上る旨あり、その事秘して知る者なし」(「史紀」)。13 日「今日小田原まで御趣しあるべしとて、供の衆もはや出荷物まで出すところに、俄に江戸において越年あるべき旨日、稲毛御馳詣」(「当代記」)。
慶長 18 年 (1613)	1 月 19 日大久保忠隣改易、21 日家康江戸を出発、23 日中原に宿泊、24 日中原を出発、25 日小田原着、「大御前大に曰く、明朝早よりこの城破却こあるべし云々、よって江戸・駿府諸卒石垣を崩し、大門を壊す、この騒動により江戸・駿府より小田原へ馳せ参る者あはて計うべからず」(「駿府日記」)。「大御前御通の朝、箱根山路次中五間すつ間を置、弓・鉄砲にて笠置あり〜昨日より西は三島、東は大磯・平塚に人を置かち、行人を留めらる」(「当代記」)。6 月方広寺大仏開眼供養の延期、10 月大坂冬の陣、4 月大坂夏の陣。10 月 5 ~ 7 日中原に逗留し放鷹。12 月 6 ~ 13 日中原に逗留し放鷹。9 日御小稲垣権右衛門処刑。11 日中原御殿にて井伊直孝へ感状下賜。
元和元年 (1615)	4 月 17 日家康死去。
元和 2 年 (1616)	3 月 20 日家康の秘が現にできる(平塚藩八王子権現にて小体の伝説)。
元和 3 年 (1617)	中原御殿が奥門を残し江戸に解体移送される。1 月の明暦の大火で焼失した江戸城の修復に再利用されたか。
明暦 3 年 (1657)	中原御殿が奥門を残し江戸に解体移送される。1 月の明暦の大火で焼失した江戸城の修復に再利用されたか。
寛文 9 年 (1669)	総検地により中原御殿付属の鷹部屋・御馬屋・御殿番屋敷、中原代官屋敷が年貢地となる。
元禄 2 年 (1689)	中原代官坪井良次が手代公金着原より道帰。
元禄 10 年 (1697)	中原御殿跡地に御林が植えられる。中原代官坪井氏が追放される。
享保 6 年 (1703)	中原代官成瀬氏が改易される。
享保 18 年 (1723)	中原御殿の礎土が廃止される。

出典略称は「風土記稿」:新編相模風土記稿。「史紀」:徳川史紀、記略、相中留恩記略  
「江戸の礎 中原御殿」(ふるさと歴史シンポジウム実行委員会、2001 年) 附表に依る

## 家康関連足跡・由緒・伝承

No	事項	村	概要	出典
1	八王子権現社	平塚宿	東照宮所在。平塚藩徳尾家が勧請した。放鷹旧跡が神祕の小休地か、安永 7 年の東照宮神祇の札が安置されたといふ。	留恩記/風土記/八王子社考
2	阿弥陀寺	平塚宿	天正 18 年、関東入国時に阿弥陀寺で昼膳を食し、翌年伏見印下願、慶長期、中原御殿からの放鷹時、當時で茶を飲み、茶器下賜。	留恩記/風土記
3	稻水家	平塚宿	家康においしい水さしあけて「稻水」の苗字を音された。	民俗 7
4	徳尾家と「出世汁」遺徳汁	平塚宿	徳尾家は三河または駿河から家康に呼ばれてきた鷹匠の一人、徳尾重人正成の子孫。平塚宿で旅籠屋を営む。家康が出生した祝計として、4 月 17 日に「遺徳汁」「出世汁」を作る慣習があった。	八王子社考
5	徳川伝説	平塚宿	家康が子どもを集めておにぎりを施した。「徳川さんは、やっぱりそういう面では庶民を大事にした」	民俗 7
6	八幡宮	平塚新宿	東照宮が所在。御神体は幣束。	風土記
7	蓮光寺	馬入村	東照宮が所在。由緒不詳。家康が中原御殿から相模川辺に出陣したのが雨のため遷御したことがあった。	留恩記/風土記
8	中原御殿	中原宿	慶長元年に造営。家康の宿所。明暦 3 年廃止。御殿跡は元禄 10 年に御林となり、のち東照宮が勧請された。中原御造営にあたり、豊田本郷から小川家、佐藤家が移住し中原宿を開発。両家は中部陸頭で、徳林寺を勤める。	留恩記/風土記/中原御言記*1/中原宿諸事明細書*2/慶長以来金目川修繕工事歴史書上巻*5/小川家由緒書/御林の心地管理回数松木改帳*3
9	成瀬酌	中原宿	中原代官成瀬氏が家康に献上。佐藤金右衛門贈進。以後、献上に付随して中原宿は人馬役が免除される。享保 8 年に献上停止。	留恩記/風土記/中原宿諸事明細書
10	清雲寺	豊田本郷村	家康が放鷹の際に立ち寄り、寺内の井水で茶を飲み、茶器を下賜。通称「御茶屋家」。	留恩記/風土記
11	中戸川家	豊田本郷村	先祖新兵衛は家康の密命で豊田本郷に移住。その子伊右衛門は清雲寺逗留の家康に伝信した。玉川の峠を献上したところ美味を賞され、田畑屋敷地・葵紋章を下賜された。	わがやのふるさと
12	徳尾家	南原村	家康が放鷹に来た際、「根下の種」が削れ、家康の機嫌を損ねた。この件で名主笹尾彦右衛門老詮誹謗した時、細いことまだら鷹が何事もなく御拳とまわったことで家康の機嫌が直り、赦免された。これは笹尾御前がの中で大川不動を念じていたことによる。	篠尾氏系譜*4
13	磯部家	南原村	家祖は駿河から家康に呼ばれてきた鷹匠の一人と伝わる。	家伝
14	四之宮遊幸船	四之宮村	慶長 19 年 11 月、大坂の陣からの帰途、四之宮の渡を渡る際に家康が騒がしく座ったため、村長は船先の方から橋を過ぎて着岸した。度怖しと念ごとく、その理由を聞いた家康は喜ばし、以後、遊船で遊幸するようになった。	平川光勇家文書 No. 253
15	箸立森	四之宮村	家康が舟当に使った箸を地にさすと身が出て杉になった。	大野誌
16	鷹匠橋	打間木新村	家康が放鷹の際、鷹匠が渡ったのが鷹狩りの通「鷹道」だったといわれている。	大野誌/民俗 2
17	八幡神社	下島村	家康が放鷹の時、鷹がそれで神木とまわったのを、当地に新鎮したら鷹が怒り神霊の上へ飛来した。喜んだ家康は社額を寄された。その旨が鷹匠に記されている。	留恩記/風土記
18	真芳寺	大神村	天正 19 年 11 月、家康が休息の際、境内の平松に隠かけて御朱印 10 石を下さった。御朱印は「御杖先御朱印」と言い伝えられている。	真芳寺文書寺宝記録の部 No. 10
19	駒返橋	田村	家康が中原御殿からの地に鷹狩りに来た時、道が思いつくところで村民が自らの豊・釜を道に置いて運ばせうとした。これを見た家康は民の腹にへたとお思い、この橋か馬を返して中原へ帰った。	留恩記/風土記
20	鷹落橋	田村	家康が田村に鷹狩りに来た折、獲物を追っていた鷹が羽を損じたことへの落ちたという。	留恩記/風土記
21	六兵衛土手	横内村	三河出身で家康の侍をしていた平井作右衛門が国元に帰ると、横内村に住む三河出身の僧法春を尋ね、法春に勧められ同村の百姓になった。その後、横内村の領主神原阿村村作右衛門が住んでいることを家康に言ふと、家康は作右衛門の望みをかなわせた。作右衛門は大神村境に地蔵を築くことを願い、許された。六兵衛とは玉川の樋口に住んでいた人の名前。	留恩記/風土記/慶長以来金目川修繕工事歴史書上巻*5
22	金目川大堤	南金目村	徳川家康が清雲寺で休んでいる時、金目川の洪水で民家が被害を受けたと聞いた。百姓を憐れんだ家康は、翌年、中原御造営とともに、大堤の普請を命じた。「御所様」とも呼ばれる。 関東入国時、道案内した宮川丹後の屋敷に家康が宿泊したが、その折、鷹が逃げてしまった。丹後が(知事)鷹を帰らせると、家康は鷹狩り、鷹として丹後社(平岡神社)鷹 2 石を寄進した。また、この時に鷹の肉付いた茶碗が下賜された。家康の鷹の跡に家康御建てがた。文化 7 年に片岡神社へ遷した。	留恩記/宮川家文書

※出典:「留恩記」:「川中留恩記略」/風土記稿:「新編相模風土記稿」/八王子社考:高橋寛著「東海道平塚宿案内小社八王子社考」平塚郷土博物館、1938 年「民俗 2」/慶長以来金目川修繕工事歴史書 No. 2 豊田・岡崎 No. 1982 年「平塚市博物館」/平塚市民調査報告書 7 平塚(市域) No. 1988 年「わがやのふるさと」/中川光隆「わがやのふるさと」1971 年「大野誌」/大野誌編集委員会「大野誌」/平塚市教育委員会、1958 年/家伝:各家で伝えられている言伝。  
※社記:「平塚市史 4 資料編近世 (3)」No. 254 / 「平塚市史 2 資料編近世 (1)」No. 56 / 「3」「大野誌」所収 / 「4」「大野誌」所収 / 「5」「平塚市史 4 資料編近世 (3)」No. 48